



campfiring

2020.9.17(木)PM22:30-18(金)AM5:00

スーザン・ソントグによる「《キャンプ》についてのノート」に書かれた58のテキストを観客と共に朗読し、アーティスト、詩人、キュレーターによるハプニングの要素を伴ったパフォーマンスが繰り広げられる。また、撮影は行わず、その痕跡を新聞として発表する。コロナ禍においてキャンプの需要が増えている。グローバルなインターネット空間から離れ、ローカルな身体を闇の中に置く。その場で、またはオンラインなどの遠隔で各々の想起された火を起こす。その様子は実際に見ることによってのみ知ることが可能。

日時：2020年9月17日(木)22:30—翌5:00 ※雨天決行、荒天中止

場所：都内某所（野外） ※予約後詳細をメールにてお知らせ

参加費：2000円（ブルーシート、フード付き）、予約制（オンラインでのみ販売）

入場制限：50人

出演：青木彬、うらあやか、カニエ・ナハ、記録係（関真奈美+玉木晶子）、黒田大スケ、小宮麻吏奈、田上碧、武本拓也、メグ忍者、山内祥太、山本悠、Ad Mornings（苅部太郎、土本亜祐美、大和由佳、Zoé Schellenbaum、Jang-Chi、他） ※記録係、黒田大スケは会場には不在。

企画：小宮麻吏奈、メグ忍者(オル太)

運営：オル太

チケット予約：<https://olta.thebase.in/items/33354933>

都会の真ん中に埋め立てられた人工の島には「夢」や「平和」など、聞こえの良い言葉がつけられていた。かつてはゴミの臭いで蠅が飛び回っていたり、もう一方では捕虜や戦犯の一次収容所だった。そして戦争の遺構は茂みの中に隠された。キャンプ場では何人かの少数のグループがBBQをしていた。

スーザン・ソントグは『《キャンプについてのノート》』の中で、「キャンプ」的な文化について58の項目の中で記述していた。人工的で都会的な感覚としての「キャンプ」を。

感覚を——とりわけ生きていて力強い感覚を——言葉でからめ取るためには、われわれは断定を避け、柔軟にふるまわねばならない。（スーザン・ソントグ『《キャンプ》についてのノート』、高橋康也、出淵博、由良君美、海老根宏、河村錠一郎、貴志哲雄訳）

その後続く58の項目から、何を絡めとることができるのか。少しずつ動いていく。誰かの声が聞こえる。反応は朝まで連鎖し続ける。止まっているのか動いているのか分からない。何かが起きているようで起きていない。時は少しずつ進む。見えない場所で見えない何かが行われている。

シャレク あたくし、とうとうやりとげたわ、ここまでやっと来たのだわ。ここでもあたくしの興味をひくのは、なんと言っても総体的な人間性、これ一つ。でもこれ、この情景、これが一体、文化だろうか？これを見ていると焼き打ちをうけたウィーンの下町の商店街を思い出すわ、破壊されたのも当然じゃないかしら。この哀れなことといったら、写真ではとって出せない代物だわ。……（カール・クラウス『人類最期の日々』、池内紀訳）

国家や都市がもたらす画一化や整備された社会の秩序の中においていかに異変に気付くことができるか。カール・クラウスが1899年から1912年まで創刊した評論雑誌「Die Fackel (炬火)」は当時の社会を諷刺によって伝えていた。投書や街の声から記事化し、のちに演劇として『人類最期の日々』に集約された。そこに集まった人々が起こそうとする火は、どのように闇に灯るだろうか。詩性やアイロニカルな批判、同化への抵抗における炬火が立ち現れる。

【出演者プロフィール】

青木彬

Akira Aoki

1989年東京都生まれ。インディペンデント・キュレーター。首都大学東京インダストリアルアートコース卒業。アートプロジェクトやオルタナティブ・スペースをつくる実践を通し、日常生活でアートの思考や作品がいかに創造的な場を生み出せるかを模索している。社会的擁護下にある子どもたちとアーティストを繋ぐ「dear Me」企画・制作。まちを学びの場に見立てる「ファンタジア！ ファンタジア！ 一生き方がかたちになったまち」ディレクター。「喫茶野ざらし」共同ディレクター。

うら あやか

Ayaka URA

1992年神奈川県生まれ。身体をヒントにできごとを捉え直す実験を行う。メディアとして、ワークショップやパフォーマンス、映像、写真、また展覧会やイベントの企画などを扱う。近年は自殺以外の方法によって思弁的に自分の生に触るワークショップ「おどる墓石」の連作に取り組んでいる。

個人での活動のほか、女性アーティストのネットワーク「female artists meeting」の企画（共同企画：津賀恵）、Ongoing Collectiveに参加。2019年よりCSLAB管理人としても活動。

<http://urayaka.jimdo.com>

カニエ・ナハ

Kanie Naha

詩人。2010年「ユリイカの新人」としてデビュー。2016年、詩集『用意された食卓』で第21回中原中也賞、第4回エルスール財団新人賞。本の装丁や、アーティストとのコラボレーション、朗読パフォーマンスも多数行っている。主な参加展に「MOTサテライト 2017 春」（東京都現代美術館、2017）、「スペクトラム」（スパイラル、2015）等。2017年にはNHKのドラマ「朗読屋」に出演、スカパー！のアートドキュメンタリー「Edge 詩人カニエ・ナハ 未だ見ぬ詩の世界へ」が放送される。2018年には米アイオワ大学に、またフィンランド、ラハティ・ポエトリー・マラソンに招聘され、朗読パフォーマンス等を行う。2020年「さいたま国際芸術祭2020」「MIND TRAIL 奥大和心のなかの美術館」に参加。

記録係

Kirokugakari

玉木晶子、関真奈美によるアーティスト・ユニット。「これで思い出せるね！」をキーワードに、作品や展覧会の核となる部分を抽出し、拡張することで記憶に残すパフォーマンスを展開してきた。展覧会の非公式な記録係として活躍している。「新しい洞窟ーもうひとつの岐阜おおがきビエンナーレ2017」（コ本や、2017年）、玉山拓郎、山本悠「ポリネシアンじゃだめですか？」（タリオンギャラリー、2018年）、「羽島市勤労青少年ホームを記憶し記録する1日」（羽島市勤労青少年ホーム、2019年）に参加。

黒田大スケ

Daisuke Kuroda

美術家。歴史、環境、身体に関する様々なリサーチを通じて幽霊のような認識されているが目に見えない存在を可視化する手法で作品制作を行っている。近年は東アジアの彫刻概念に関するリサーチを通して、自身の身体から「彫刻」という亡霊を引き剥がすように作品を制作している。身体と意識の狭間で生じる、錯覚と混乱と盲信を楽しむが、決してそれらを信じてはおらず、体を動かして健康体でありたいと思っている。

小宮麻吏奈

Marina Lisa KOMIYA

1992年アトランタ出身、東京在住

自身の身体を起点とし、新しい生殖／繁殖の方法をパフォーマンスや映像、場所の運営などメディアにとらわれず模索している。近年の主なプロジェクトに花屋の経営をする「小宮花店」、オルタナティブスペース「野方の空白」の運営、近年の主な展覧会に「-ATCG」(TAV GALLERY)、REBORN ART FESTIVAL 2019 (宮城県) など。

田上碧

Aoi Tagami

アーティスト、ヴォーカリスト。自身の声と言葉を用い、「歌」を探求する。2014年頃より、野外から劇場空間まで、幅広い場でパフォーマンスを発表。歌うことを異化するパフォーマンスや、歌と語りを織り交ぜた楽曲の演奏を通して、身体と空間との関係を探る。

<http://aoitagami.com/>

武本拓也

Takuya Takemoto

いるという事への関心のもと、上演を行っています。

ソロ公演に「正午に透きとおる」(2019 TPAMフリンジ参加)、「象を撫でる」(2018 SCOOOL)など。

武蔵野美術大学映像学科卒業。

美学校 実作講座「演劇 似て非なるもの」修了。

美学校 特別講座「杖をつくる」講師。

自身の上演の他、悪魔のしるし、神村恵、百瀬文らの作品に出演。

<https://www.takemototakuya.com/>

メグ忍者

MEGUNINJA

1988年生まれ、千葉県出身。アーティストコレクティブ、オル太のメンバーとして活動。個人では、幼少期の遊びや記憶をもとに、世界に対しての些細な反逆を試みる。「piping pipe」(浅草橋天才算数塾、2019)、「Firing」(多摩川河川敷、2017)など、様々なアーティストとの共同制作や自身による企画も展開する。

山内祥太

Shota Yamauchi

3DCGとクロマキー合成という簡易的な合成方法を組み合わせた映像作品や、近年はVRを体験すること自体を作品とする自己言及的かつパフォーマンス的な作品制作にも取り組む。

またデジタル作品だけではなく、粘土を使用して制作した彫刻と映像を組み合わせる方法をとることで、デジタル的な新しさだけを追い求めるのではなく、人間的な生々しさや普遍性を絶えず意識し、制作に取り組んでいる。

主な展覧会歴に「TOKYO 2021-un/real engine -慰霊のエンジニアリング/ 戸田建設本社ビル1F 東京 2019

「イン・ア・ゲームスケープビデオ・ゲームの風景, リアリティ, 物語, 自我」/ICC, 東京, 2019

「六本木クロッシング2019-つないでみる」/森美術館, 東京, 2019 など。

<http://shotayamauchi.com/>

山本悠

Yuu Yamamoto

イラストレーター。学生時代、校内に潜入していたメグ忍者と出会う。近年の主な発表に、角銅真実「Dance」のミュージックビデオや、網守将平「パタミュージック」のアートディレクション、砂山太一、浜田晶則の展覧会「鏡と天秤」のグラフィックデザインなど。

Ad Mornings

「Random Sign (無作為の徴)」のアナグラムであり、「行為のスペック」と「痕跡のトレース」を掲載する新聞をつくるプロジェクト。東京藝術大学大学院映像研究科が主催する「メディアプロジェクトを構想する映像ドキュメンタリスト育成事業」(通称、RAM Association)のプロジェクトとして企画された。参加するメンバーは、Jang-Chi、苅部太郎、土本亜祐美、大和由佳、Zoé Schellenbaum、他。

【運営プロフィール】

オル太

OLTA

2009年に結成した6名(井上徹、川村和秀、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi)によるアーティスト・コレクティブ。創造行為、ひいては人間の根源的な欲求や感覚について、自らの身体をパフォーマンスという形で投げ、問いかけている。近年参加した主なパフォーマンスや展覧会に、『超衆芸術 スタンドプレー』(ロームシアター京都×京都芸術センター U35創造支援プログラム"KIPPU"、2020)、「青森EARTH2019:いのち耕す場所 -農業がひらくアートの未来」(青森県立美術館、2019)、「Hybridizing Earth Discussing Multitude」(釜山ビエンナーレ、2016)など。